浄土真宗本願寺派 小倉組

サンガ小倉

2017年
春号

平成29年
2月発行

「東京藝大」と小倉組

西教寺住職　日野 真人

ベストセラーとなった『東京藝大』を読みました。

芸術家の卵たちの奇想天外な、そして情熱溢れる学生生活に驚かされました。その中で特に興味深かったのが、藝大生たちは、作品を作るための道具から自作することです。物作りの学科生は、コテを使う者はコテから、そして作品を置く机まで自作します。

本文中のエピソードに、藝大生が父親から誕生日に一枚の板をプレゼントされ、とても喜ぶシーンがありました。「何かテーブルでも作ればよい」との父親の言葉に心底喜ぶのでした。

また音楽科の学生も、学祭時のコンサートのパンフレットからステージ飾りまで自作するそうです。もちろん楽曲の紹介文から司会までこなします。

わたしたちの知っている芸術作品が完成するまでにも、同じような工程で行われているのだと感じました。細部にまで目を配るということは、ことの始まりから作り込んでいく作業によって支えられているのでしょう。しかもこれら情熱的な活動を、最初から望んでいた人ばかりではないことも意外でした。思わぬ進路変更から芸術の世界へ飛び込んだ方もおられるのです。

このような生活、お寺の活動に似ていると思いませんか？

お寺でも法要前のお磨きから、お斎作り、そして帳場を担当したりもします。

また組内行事ではホールでの誘導から、写真撮影、そしてお勤めの導師やら司会、それに雅楽まで演奏します。活動によっては、何百年もの間、連綿と続けられてきたこともあるはずです。活動をする人は時代によって変わり、方法も変わってきているのでしょうが、お寺の本堂で御門徒さん方が、丁寧にあらゆる活動を行ってこられたのが目に浮かぶようでもあります。

かたや藝大、こなたお寺。まったく共通項のなさそうな二つですが、そこには細部さえおろそかにしない人々の息吹が感じられます。

最後の秘境
『東京藝大』
天才たちのカオスな日常